史料

中世の道路交通（三）

——路邊から展望せる中世の諸相——

渡部英三郎

（鎌倉時代の卷）

——目次——

一、聚落の姿相と途上風景
二、路邊に漂ふ宗教的雰圍氣
三、旅人の種々相
◎山伏
◎僧侶
◎商人（人買商人も）
◎武士
◎百姓

一、聚落の姿相と途上風景

鎌倉時代の路邊一帶には、商工的活動が醞釀する賑かさと、一種のせゝこましさとが、まだ一般的には漂つてゐなかつた。其處にはまだ中古の面影を止めてゐる純農、純漁に近い小聚落が寂寥として續く風景の中に疎らに點在してゐ

た。路邊の盛り場を成してゐた宿驛や神社佛閣の存在地などでさへ、その社會構成は、極めて單純であつて、住民等の多くは一般的に農・漁の業を營む人々であつたようだ。多くの宿驛に於いて、まだ專門的にまで分化した旅宿さへが在つたかどうか疑問である（前文參照）。農・漁等の自然的生産業から分離して專門化した商業や工業が在つたらしい形跡も認められない。勿論當時の代表的な都市であつた京都や鎌倉や平泉（藤原氏の在世中）などは例外であるし、その他にも特に交通の要衝を占めてゐた宿驛や港津などに於いてはそうした職業的分化が、他の地方と比較しては、進んでゐたに相違ない。其處には稍都市的形態にまで發展しかけた人屋の聚落があつたし、殊に港津には「問丸」の如き、運送業、倉庫業、商業、旅宿等を兼ねた經濟主體が發達して、商業的色彩が漂つてもゐた（德舊氏「中世に於ける水運の發達」）。然し、斯うした現象は當時の社會に於いてまだ決して一般的ではなかつた。自然發生的道路（改修を加へられない道路を假りに斯う稱して置く）の邊りに沿つて農や漁の聚落が、ひつそりした姿相を横へてゐるだけであつて、商工業的活動の旺んな地方を特色附ける賑かさや、もの〻動きはまだ見られなかつた。僅かにその萠芽が、日を定めて開かれる市や、宿驛に在つて商工を兼ねる一部の農漁家の活動などに見出されるばかりであつた。

鎌倉時代が有つた斯うした社會發展の過程は、次に引用するやうな村邑の面影やそれ等の村々を連ねてゐた路邊の面影などの裡にもほのかに窺はれるのである。

漸く行く程に、都も遙かに隔たりぬ。前途林かすかなり（中略）後路、山路さがりて、たゞ白雲の跡を埋む。既にして斜陽景晩れて、暗雨しきりに笠にかゝる（海道記）。

これは「海道記」の記者が都を立ちいで、勢多の橋を渡つて伊勢路へ向ふ途上で見た沿道の光景であつた。

（附記）「海道記」の記者が旅したのは四月十日過ぎのことで、彼は近江から美濃路によらず、南下して伊勢路を過ぎ、東海道へ出た。當時の東海道は、まだ往時のまゝで、近江から美濃を經て尾張へ出るのが順路であつたのである。

三河國豊河を過ぎた邊りには、

豐河を立ちて、野くれ里くれ、遙々と過ぐる峰野の原と云ふ處なり。日は野草の露より出で若木の枝に昇らず、雲は嶺松の風に晴れて、山の色天と一つに染めたり。遠望の感、心情つなぎ難し。

山の端は露より底にうつもれて野末の草に明くる凌震（同上）。

と記されてあるやうな風景が展開してゐた。

林の風に送られて、廻澤の宿を過ぎ、遙か見亘して行けば、丘邊には森あり、野原には津あり（下略）（同上）。

これは池田の宿に辿り着く前の、途より風景を叙べたものである。

眼に遮る者は檜厚槇葉、老の力こゝに疲れたり。足に任する者は、蘆の岩根勤の下路、嶮難に堪へず。

これは尾張國宇津山附近の路邊の風景であつた。その他の途上風景についても「海道記」の記述は大體斯うした色調で彩られ、其處には村邑が遠く疎らで、山や野や林が續き、人煙稀れな、さびしい路邊が想見せられるに過ぎない。

次に同じ記者は村邑附近の情景を描記して、

田中打過ぎて、民宅打ち過ぎ、遙々とゆけば、農夫双立ちて、笛をうつ聲、行鴈の鳴渡るが如し。田を打時は双立ちて同く鋤をあげて歌をうたひて打つなり　卑せ打ち群れて、前田に忽く摘む。存外ぬしづくに袖ぬらす。そとの小川には河傍楊に風立ちて、鷺の蓑もうちなびき、竹の編戸の墻根には卯花咲きすさみて、山郭公忍びなく。

これは近江國を過ぎながら眺めたさる村邑近き邊りの情景。村の中では奇犬が旅人を見て頻りに吠えてゐたといふ（同上）。

かくて邑里に出で、田中の畔を通れば、左に見、右に見る、立田眇々たり。或は耕し或は耕さず。而のみならず、池溝かた〳〵に決りて、水をおのがひき〳〵に論じ、畦畝、畔を並べて、苗を我とり〳〵に蓺たり（同上）。

これは、近江と伊勢との境、鈴鹿の山を起えてから間もなく見た村落近き田畝の有樣。

渡り果つれば、尾張國に移りぬ（中略）見れば又、園の中

に桑あり、桑の下に宅あり、宅にに蓬頭なる女、蠶簀に向て、蠶養をいとなみ、園には潦倒たる翁、鋤を柱いて農業をつとむ。大方禿なる小童部といへども(中略)弱くしてより業をならふ有樣、哀れにこそ覺ゆれ(同上)。

これは尾張國を過ぎつゝ見た農耕の情景であつたが、當時の農民の生活を彷彿として想見せしめてゐる。また海邊の村里についても、ほゞ同じやうに漁人が海に漁撈してゐるさびしい情景が描かれてゐるだけである。斯樣に「海道記」に現はれて來る村邑は、そして多くの宿驛でさへも純漁の聚落であつて、其處には商家が軒を並べて賑かであつ農、純た面影も、また工人等が家業にいそしんで手工業が發達しつゝあつた有樣も窺はれない。たゞ大津の津、由比ケ濱に、船舶が輻輳し、人家が連擔してゐてその賑やかさに目を見張つた有樣が窺はれるだけである。

「東關紀行」にも、萱津の賑やかな市の日に就いて、商業的な活動を記してゐるだけで、その他は大體に於いて「海道記」と同じやうな村邑や路邊の面影が窺はれるだけである。また「海道記」[1]の記者が旅行してから五十四五年の後に、同じ街道を旅した者の手に成れる「十六夜日記」にも、別に東海道沿線の目立つた發展を想はせるやうな記述は見出されない。

「註」(1) 但し「十六夜日記」の記者は近江から美濃を經て尾張へ出た。

これを、江戸時代の旅行者が、同じ東海道を旅して沿道村落の目覺ましい發展の情勢を述べ、「兩側に軒を並べて長く延びたる町通あり。國道はそれを兩側に見て貫くなり。町通の長きため、一村は時として殆ど一里の四分の一も隔たれる次の村まで達するなり。斯如くして一村が次第に增長して他村と連絡するもの少からず(江戸參府記)」と記し、また沿道の多くの村落が、商業的分子を多分に包含して構成されてゐた有樣を傳へては「都市、市邑、村落に於いては、多數の店舗は、時に街道の兩側に沿ひて、殆ど空地なきまでに櫛比して、盡くこれを占むることもあり、全國を擧げて顧客とするも猶足らざるべく、吾人は顧客が何處よ

りかくも寄せ來り、かく澤山の賣主は如何にして自ら養ふかを解し得ずして怪み驚くばかりなり（同上）」と述べてゐるのや「世營錄」[1]が在々の村落にまで商家が簇出しつゝあつた有樣を記して「近來連々、在家殊に商人出で酒屋は勿論、百貨を賣買する故に、居なから自由足りて奢侈し（下略）」と云つてゐるなどゝ比較すると、同じ封建の社會であつても、この二つの時代には、遙かにかけ離れた二つの發展過程が見出されるのである。同時にまた、著しく相異した道路交通の面影が窺ひ偲ばれるのである。然し、斯うした素朴で純農漁的な村邑にも其内部に商工業的な活動が全然なかつたものとは考へられない。其處にも商業的・工業的活動が、農家の内部に萠芽しかけてゐたに相違ないのである。また沿道の村々も決して貧しい農夫等の住むあばら屋ばかりではなく、所々には土堤が廻らされたり、堀が廻されたりした「館（やかた）」の類も在つた筈である。當時の旅日記が、それ等の特殊な建物に就いて何も書いてゐないのは不思議である。斯うした建物は、川を控へたり、山の根に位置したり、丘の起伏を利用したりして要害の場所に設けられてゐたものと思はれるから、街道からは相當隔つた位置に多くは在つたであらう。然し何れにしても幾つかの村邑を支配する支配者が地方毎にあつて、後等が其土地に本據を有つた當時の社會に於いて、彼等の住居が農夫等の住む「賤が伏屋」とは比較にならぬ廣大な、目立つた建物であつたことは疑ない。鎌倉幕府の直接の支配下に在つた「御家人」の所領には、地頭があり、守護があつて、前者は租稅等をはじめ民政の分野を掌り、後者は警察軍事の分野を所管としてゐた。彼等は、何れも、その領内の人民に對する事實上の支配者であつた。また、未だ幕府の直接の支配下に屬するに至らず、前時代からのまゝ、莊園としての存在を續けてゐる土地に在つては、其處に在住して、本所（莊園の所有者にして、主として奈良京都の貴族寺院）に代り、莊園内の耕民から、租稅貢物の徵收や、それ等の貨物の處理などに當つてゐた莊官が居た。彼等の勢力範圍は、時代の推移してゆくに隨つて、漸次鎌倉の支配下に立つ武士のために侵蝕せられては

あつたが然し、尙その管理する莊園内に於いては、農民に對する事實上の支配者であつたのである。

勿論、村邑毎に、そうした特殊な階層の人々が居住してゐた譯ではなく、彼等はその本據から數邑または數十邑に亙つて支配の手を伸べてゐたのであるから、街道筋に「館」があつたにしても、それが村邑毎に在つたのではない。殊に守護は一國または數國を管轄する有力な豪族であつたからその附近には多くの一族郎黨の住家などもあつて相當大規模な館に居住してゐたことゝ思はれるのである。これ等の守護地頭や莊官等は領内の住民を使役し、耕作ばかりではなく其必要に應じて男は細工、鑄工、織工などの手工業に從事せしめ、女は染物、張物、縫物、織絲、組絲などに從事せしめる場合もあつたから、所によつては、前に掲げた旅日記にその蕭條とした面影を偲ばせてゐるやうな、純農の村邑の内部にも、手工業が多少の發達を遂げてゐたものと考へられるのである。それに伴つて交易賣買等も行はれて商業も漸次專門的分化への方向に向つて進んでゐたであらう。然し少くともまだ、後世に見られるやうな、商工業的活動は、此の時代の村邑の表面に顯著な現はれを示すに至らず、前に述べたやうな、純農または純漁の色彩がさびしい路邊に點在してゐた村邑を、一色に彩つてゐたのである。

二、路邊に漂ふ宗教的雰圍氣

鎌倉時代の路邊には、斯うした純農漁業的な生活基調の上に立ちこめてゐる宗教的な雰圍氣が濃厚に漂つてゐた。それは前時代に隆興を極めた宗教的勢力が、此時代になつては衰退の過程を辿りつゝあつたとは雖も、尙强大な社會的文化的影響力を保ちつゝ存在してゐたことを示すものであらう。路邊に在つた寺院や神社や堂塔その他の宗教的な存在は、此時代の民衆の低き生活レベルと一つの對蹠を成しつゝ、顯著な高き文化を表徵してゐた。そして旅人等は、何れも行く先々で、そうした宗教的存在に心を惹かれ、眼を注ぎながら、旅を續けてゐたのである。

小關を打ち越えて、大津の浦をさして行く。關寺の門を左に顧れば、金剛力士、忿憤のいかり、眼を驚かし、勢多の橋を東に渡れば、白浪漲り落ちて、流躬のながれ身をひやしぬ(海道記)。

これは「海道記」の記者が、近江の關寺の門前で見た金剛力士の像であつた。熱田の神宮に詣でゝは、

鳥居に向て、阿字門を觀ざれば(中略)其土木霜泊りて、瓦の上の松風天に吹くといへども、靈驗日々新たにして、人中の心華、春の如く開く。而のみならず、林梢の枝を垂れる、幡蓋を社棟の上に覆ひ、金玉の擔に瑞うつゝ嚴錦を神殿の面に瑩く。

と記し、宇度島を過ぎ久能寺に詣でゝは、

濱の東南に靈地の山寺あり(中略)堂閣繁昌して本山中堂の儀式をはる。一乘讀誦の聲は十二廻の中に聞えて絶ゆる事なし(中略)伽藍の名を聞けば久能寺と事ふ(中略)佛法興隆の砌、數百箇歳の星漢、霜泊りたり、僧俗止住の峰、三百餘宇の僧房霞ゆたかなり。

と記してゐる。それを旅宿や民屋などについての記述(前文參照)に比較すれば、これ等の宗教的建築物や彫刻などは、何れも優れた技術と巨額の經費とによつて建造せられ、異れる文化のレベルを示してゐた有樣が窺はれるであらう。

奈良朝の頃から、佛教が如何に強大な勢力を成し社會を佛教的色彩を以つて塗りつぶしてゐたかは、周知されてゐるが、平安朝末期時代になつては、寺院は公卿及武家(平氏)に對立する政治的勢力となり、屢々朝廷に對し奉つて强訴したり、平氏の權力に楯突いたりしてゐた。源朝政が以仁王を奉じ、平氏討滅の兵を擧げて破れるや賴政の一族及びこれに從軍せる僧三百餘名は、遁れて奈良に入り興福寺に入らうとした。以仁王も奈良に向はんとせられた流矢のために崩御せられた。此時興福寺は、實に奈良の僧兵三萬人を集め(誇張があらう)、以仁王を迎ひ奉るべく木津川まで出陣せしめといふ。以つてその實力を知るべきである。鎌倉時代に入つては寺院の勢力は次第に武家によつて侵蝕せられ、その經濟的基礎を成せる莊園は急速に武家のために蠶

蝕せられてゐたが、尙侮り難き潛勢力を有つてゐた。鎌倉幕府が天下靜平の障碍として、血眼になつて搜査してゐた義經を彼が奥州に下るまで約二年に亙つてかくまい幕府の追捕を不可能ならしめたものは、近畿に於ける寺院の力であつたのだ。

そうした宗教的勢力は、右に述べたやうな寺院堂塔となつて、路邊にまでその現はれを示してゐたのである。神社に就いても、寺院より低き程度にいてゞはあるが、同じことが言ひ得る。

前時代以來、斯樣に大きな力を以つて社會を支配して來た宗教は、またさゝやかな塚、僧庵、卒都波道祖神などともなつて、道路の邊りに現はれ、道行く人々の感情を支配してゐた。そして路邊の到る處に、宗教的雰圍氣を漂はせてゐたのである。前に述べたやうに奥州藤原氏の領内で笠附の卒都婆が一町毎に樹てられて、示道標とされてゐたことなどは、そうした事實を最も明かに示すものであるが、「東關紀行」をはじめこの時代の代表的な旅日記にも、路邊に顯現してゐた同じ現象が窺はれるのである。

「東關紀行」の記者は、宿驛の遊女や、交通情勢の變化に伴ふ宿驛、村里の榮枯盛衰をはじめ、人の世の姿に、溫い涙を罩めながら旅を續けた人であつたが、道路の邊りに、いろ〳〵の傳說に彩られて在つた宗教的な諸表徵にも深い感情を寄せた有樣が偲ばれる。彼が舞澤の原を過ぎて、

末遠き野原なれば、つく〴〵と眺めゆくほどにうちつれたる旅人のかたるをきけば、いつのころよりとは知らず、此の原に木像の觀音おはします。御堂など朽ちけるにや、かりそめなる草の庵のうちに雨露もたまらず、年月を送るほどに、一とせ望むことありて、鎌倉へくだる筑紫人ありけり、此の觀音の御前にまゐりけるが、もしこの本意をとげ、故鄕へむかはゞ、御堂をつくるべきよし、心のうちに申しおきて侍りけり、鎌倉にて望むことかなひけるによりて、御堂をつくりけるより、人多くまゐるなんとぞいふなる。聞きあへず其の御堂へ參りたれば、不斷香の煙、風にさそはれうちかほり、あかの花も露鮮か

なり。願書とおぼしきもの、斗帳の紐に結びつけたれば、弘誓のふかき事うみのごとし（下略）。

と記してゐるなどは、人烟稀れな道の邊に、漂ひ流れてゐた時代の宗教的雰圍氣をまざ〳〵と想見せしめる。また小夜の中山にさしかゝる前に、通り過ぎたとある社を見て、

ことのまゝと聞ゆる社、おはします。その御前をすぐとて、いさゝかおもひつゞけられし。

ゆうだすきかけてぞたのむ今思ふ
　ことのまゝなる神のしるしを。

と記し、宇津の山中に、獨り住む僧の庵を訪ねては、

道のほとりに札をたてたるを見れば、無緣の世すて人あるよしを書けり。道より近きあたりなれば、少し打入りて見るに、わづかなる草の庵のうちに獨りの僧あり。畫像の阿彌陀佛をかけ奉りて、淨土の法文など書けり。

と書いてゐるし、その草庵の附近に、何かで有名であつたらしく卒都婆のあつたことを傳へては、

此の庵のあたり幾程遠からず、峠といふ所にいたりて、おほきなる卒都婆の、年經にけると見ゆるに、歌どもあまた書きつけたる中に、東路はこゝをせにせん宇津の山あはれもふかし蔦のした道、とよめる。心とまりておぼゆれば、そのかたはらにかきつけし。

　我もまたこゝをせにせん宇津の山
　　わけて色ある蔦のしたつゆ

と記してゐる。話が少し横道にそれるが、

猶うちすぐるほどに、ある木陰に、石をたかくつみあげて、目にたつさまなる塚あり。人にたづぬれば、梶原が墓となむこといふ。道のかたはらの土となりにけると見ゆるにも、顯基中納言の口ずさみ給へけん、年々に春の草のみ生ひたり、といへる詩、思ひいでられて、これもまた古き塚となりなば、名だにも殘らじとあはれなり。

と記したのはこの邊りで殺された賴朝の寵臣、梶原景時の墓塚を見た時のことであつた。賴朝の在世中一代の權臣として勢威並びなく、帷幄に參劃したり、軍陣に勳功を樹てたりしたが、その惡質な中傷讒言のために、幕府の誤解を

蒙り、沒落した者が少くなかつた。頼朝が死んで頼家の代になると諸將の彼に對する憎惡反感は遂に爆發した。危險を覺つた景時は、早くも鎌倉を脱して此處まで逃れて來たが、諸將の憤怒はおさまらず、彼等の追擊を受けて、一族郎黨と共に、路邊の露と消えたのであつた（吾妻鏡に據る）尤も、斯等の旅行者の日記が、何れも消極的な、寧ろ遁世的ともいふべき宗教的感情に充されてゐるのは、彼等が新らしき時代の波に乘つて伸び上るべき立場に在る人々ではなく、揃いも揃つて、舊時代の中に生ひ立ち、舊き時代の文化を肯定しつゝ生きて來た人々であつたからであらう。平安朝末期に於ける舊時代の代表者等を特色附けてゐた「諸行無常」の人生觀を、彼等も抱いてゐる人々であつた。

然しやがて一方にはまた、熱烈火の如き日蓮の如き者も現はれて、武士諸般の歸依を得、幕府を衝動するやうな存在となつた。そしてそれも道路の邊に特殊な現れを示すに至つたのである。兎に角、當時宗教が占めてゐた社會的領域は非常に廣汎であつて、その人心に及ぼしてゐた影響力が、極めて大きかつただけに、路邊に於けるその顯現も顯著であり、その一帶に浮動してゐた宗教的雰圍氣も濃厚であつたのである。

天といふものは遠いものである、……月をみてくだらぬ歌を詠むよりも芋食て屁こけ雪の下人といふ蜀山人の歌があるけれどもそんなものは自棄になつてしまふ、月を見てその月の精靈に激發されて人間の心の奥床しい微妙の點を覽察して玩味すると云ふやうなことを……人は常に駸々として向上の精神がなければならない、その向上の精神が一點でも崩せば決して遠いものではない。（明治聖皇の御製）

あきらけき月に向へば久方の
空もしたしくおもほゆるかな

を拜讀し云々……（田中智學）